

「手記」と小説のはざま

長野 秀 樹

一

資料を見ていただいでわかるように、表現の「些末」な点にこだわって、本文を引用してきております。研究史と先行論については、中野和典さんがきちんと、纏めてくれるだろうと期待しております。難しい話は柳瀬善治さんがしてくれるだろうと思ひまして、私は、本文内部をもう一回読んでみようということで、そういう読み方をしたいこうと思ひます。よろしくお願ひいたします。

太田洋子『屍の街』は全体の構成として、三部に分かれています。1章から9章まで、それから、10章から26章まで、27章から30章まで、という構成です。物語内容の時間の流れは、10章「運命の街・広島」が実際の被爆の当日から描き出されていて、それから、1章「鬼哭啾々（ききくしゅうじゅう）の秋」に戻って、それから16章「街は死体の襤褸（ぼろぼろ）筵」につながっていくという構成になっています。

特別な構成というわけではなく、語り手の現在から物語の時間が始まって、8月6日の回想になり、再び語り手の現在につながっていくという形です。そのことについては、作品内部から物語の中の時間の経過と、それから語り手の現在を確認していくという作業をしてみました。この場合、語り手の現在、ほぼ作者の現在と重なり合うと考えていいのではないかと考えています。つまり、実際に、作者がこの作品を書いた現在と語り手の現在はどうも重なっているというふうには考えております。そのことは、またあとでお話をいたします。

最初に「原爆文学における表現技法の骨格」ということについて説明いたします。これは、ほぼ「黒い雨」（初出は「姪の結婚」「新潮」昭和40年1月〜41年9月、『黒い雨』昭和41年10月、新潮社刊）などに使われている「技法」は「屍の街」に出揃っているといつてもいいのではないかということです。先ほど10章から被爆の当日が描かれていると言ひましたが、実際は10章というのは広島島の歴史が語られています。そういう歴史的背景がある街に原爆

「が落とされたのだということです。そして、11章から実際に被爆後の広島の様子が描かれています。」

まず、そこに描かれるのは妹、それから母親です。身近にいた二人の様子が次のように描き出されているわけです。

血まみれの妹が化物のような顔に変わりはてて、階段の途中まであがつて来た。白い服は染めたように真赤になり、白い布で顎を釣った顔は紫の南瓜のように腫れていた。

「お母さんは生きてるの。」
私ははじめにそう訊いた。

被爆直後に、妹と再会した場面です。これ以外にも、直接的に原爆の被害に遭った人々の描写はもちろん続いています。引用は省略して、次に直接的な熱風や衝撃波などによる被害ではない「放射線の影響」について確認します。被爆当日だけではなく、その後の影響というのがそこに書かれています。これもひとつだけ例をあげました。

けれどもかすり傷ほどの軽傷者や、裂傷や火傷もなく、けろりとしていた人が、ぞくぞくと死にはじめたのは、八月二十四日すぎからであった。(中略) そのころ、八月六日の当日、広島にはいなかった人で、あとから死体の取りかたづけなどで勤労作業に出て行った地方の人までが、死ぬと云われた。

こうした放射線による影響の例はたくさん出てきますので、全部挙げきれませんので、一箇所だけ挙げていますが、引用に見るように「八月二十四日すぎ」から放射線の影響で亡くなっている人がでてきます。もちろん「放射線」あるいは「放射能」という言い方はされません。「毒」という言い方が多いのだろうと思いますが、引用にあるように、「けろりとしていた人が」亡くなっています。

それから「病院」です。「黒い雨」にも「病院の梶田医師」がでてきますけど、やはりここにも父親と関係のある「S老医師」を通じて病院の中でのさまざまな患者の様子が書かれています。それから、「新聞記事」が多数引用されています。

定型的な症状というのは、研究にあたった学者たちによって、広島の中国新聞に次のように発表されている。

発熱、

脱力、

食欲不振、

無欲顔貌、

脱毛（ひきちぎったようでも毛根がついていない）

出血（皮膚点状出血、鼻出血、血痰、咯血、吐血、血尿など）

口内炎（とくに出血性菌膿炎）

扁桃腺炎（とくに壊疽性扁桃腺）

下痢（とくに粘血便）

この引用が最初ですが、この後も次のような述懐もあります。

私は次に、手許にある新聞の材料から、原子爆弾からうけた、形のうえの被害の性格を、のちの日のために書きとめておきたい。——どういうわけか、そのうえでなくては、広島市のあの夏の朝の出来ことを書きはじめると私にはなれない。——

これ以外にも、様々なかたちで「新聞記事」が、直接の体験を補う形で、原爆の総体を表すために使われていくということになるのだと思います。

これは、おそらくは、作者自身が原爆について、自分の体験以外の原爆の実相というか、総体としての原爆を確認したいという願いがあって、その作業として、「新聞記事」を丹念に読んでいます。それが作品の中に引用、反映されています。

それから、同じように他の原爆を題材にした作品にみられる特徴が、「屍の街」には出ています。たくさんの「噂」です。「黒い雨」にも縁談が起きるたびに流される、矢須子が「広島第二中学奉仕隊の炊事部にゐた」という噂をはじめ、様々な噂が出ていますが、「新聞記事」という、ある程度は信頼できると判断される情報とは別に、不確かではあっても、誰もが確実な情報を求める中で様々な「噂」が流されます。

その七月から八月はじめにかけて、次のような推定意見が市民の間に流れた。

アメリカの爆撃機が、広島地方の北方の山奥にある、大

きな河の堰を切るという噂である。

これらのことについて山本昭宏さんは「黒い雨」に限らず、「大田が、自ら目指した「新しい描写の言葉」を獲得できたとは思えないが、(記録) 化の苦闘は、先行する原爆関連のテクストを引用するという、後に阿川弘之や林京子が行う「原爆文学」の手法を開いたのだといえるだろう。」と述べています^①。

つまり、すでにこの段階で大田洋子が「噂」でありますとか、そのほかの記録性のある文章を引用するという方法は、これらも「黒い雨」が典型的に使った「手法」でありますが、それらに先行して「屍の街」があるということは、これは間違いないと思います。

両者の間に、直接的な影響関係があるかどうかについては、論じませんが、少なくともここに原型があるということは間違いないと思います。それから、フランシスコ・コモッティさんは、次のように述べています^②。

「パフォーマンス」として作品を享受することへと誘う理由の一つは作品の内在的な多様性です。『屍の街』は、既成の如何なるジャンルにも属さず、物語自体は種々の変化に富んだ経過を辿ります。原爆というできごとの証言は、作品のなかほどのいくつかの章においてのみ行われています。

それ以外の章では、当時の中国新聞に載った記事とか、大田の戦争についての政治的考察とか、原爆症に関わる看病の情報や、被害者の身元確認、あるいは広島島の『風土記』

や、被爆後の広島とキューバの首都ハバナの状況との比較、そして一九四五年の九月の台風の記録などが述べられています。さらに戯曲の援用や比喩もあります。

作中に様々ななかたちで引用が行われ、それらが作品の重層性を生み出し、充分に総体というか当時の広島状況が、後半の台風の記録とか大雨の記録なども含めて描き出されているといつてもいいと思います。

それは、大田洋子自身は「屍の街」を小説的作品として構成する時間を持たなかつた」と言い、「いずれの日か私は、不完全な私の手記を償うべく、かならず小説作品を書きたい」と述べていますが⁴⁾、果たして、この言葉をそのまま信じていいのかという問題とも重なってきます。

以上、第一の指摘ですけれども、「屍の街」には、この後原爆文学作品の主要な要素となっていく要素が題材として、また、作品構成上にほぼ出揃っているということを指摘しておきたいと思えます。そして、そのことは作者が言う「記録」性のみが、「屍の街」において、求められているわけではないということに関係してくると思います。そのことについては、次の「物語と語りの現在」という視点と関連させながら、考えてみたいと思います。

二

9 ページに、「いまではその人達が村中にみんなで三百六十人あまりになり、九月も終わろうとする今もなお、毎日たれかが死

の影を背負って帰ってくるのである。」という表現がでてきます。「九月も終わろうとする今」の「今」というのは、語り手が語っている「今」です。ただし、一人称回想形式の本作において、語り手と作者と登場人物としての「私」は、接近しています。そう考えると、語り手の「回想の現在」である「今」は、作者が書いている「今」というふうには理解できるのではないかと思います。(もちろん、推敲ですとか、改稿の問題はあるわけですが、今回は、その点には言及しません。)

そうすると実は、こういうふうには「語り手の現在」、あるいは作者が書いている時間を推測できる箇所というのが何カ所かあります。

例えば、21章の102ページのところには「(後に広島文理大の藤原博士が報告された火の玉のことや、方々の河に火の玉が浮いて、ところともえていたという話が信じられる。)」というふうには書かれています。この「後」というのはこの時点よりも、「物語の現在」よりも「後」ということです。そして、115ページには「初めの方に書いたように、私にとつてS氏は父のような気をする知人だったので」と、はっきりと自分が「書いた」と作者としての自分を表明する、言い方ができます。

また、120ページにも「するとだしぬけに、二十日をすぎて間もなく、広島から来ていた戦災者たちが、はじめの章に書いたような原子爆弾症に犯されては、次々と死にはじめたのだった」という表現がでてきます。それから155ページに「はじめの方に書いた銀ちゃんという人は、S医師も九月末まで生きるかどうかと云っていたのに、いまも生きている。」という表現があり、同じ

ページには「私も、理解出来ない死の影を三ヶ月垣間見ているうちに、死から遠のいた。」という表現もあります。

「九月も終わろうとする今」、というのが第1章にあつて、第30章に「九月末まで生きるかどうかと云つていたのに、いまも」と言っているということは、ここでは少なくとも十月以降だということになります。それから、先ほど確認したように「死の影を三ヶ月垣間見ているうちに」という表現から逆算すると、10月を過ぎて11月にかかつている、ということになります。もちろんこれは、作品の末尾に日付が丸で囲つて入れてありまして、(昭和二十年十一月)となつていることから、推測できることです。

以上のことから、だいたい執筆順序が推定できるのだろうと思ひます。

私はまず、11章から書かれたのだろうと思ひます。11章から20章までがまず書かれて、前後が加筆されたと考えられるのではないかと。1章から10章までと、21章から30章までは、先ほど確認した「初めの方に書いたように」という表現などから推測して、11章から20章までの次に、1章から10章が書かれた。ただ、10章については、どの時点で書かれたのかはよくわかりません。10章の内容は広島市の歴史なので、これは後から書かれて、ほんと投げ込まれたという可能性もないわけではありません。11章以降と同じ「運命の街・広島」の章ですけれども、おそらくは10章だけはあとから書かれたのではないかと推測は成立すると思ひます。

最初は11章から書かれた。つまり、原爆の当日が書かれて11章から書きだされて、20章までが書かれた。それから第1章

に戻つて、1章から10章までが書かれた。さきほども言いましたように、10章はひよつとしたらここで書かれたかどうかはわかりません。あとで投げ込まれたかもしれないという可能性は残ると思ひますが。そして、いちばん最後の21章から30章が書かれた。これは、「初めの方に書いたように」や、「はじめの章で書いたような」という言葉を素直に信じているというのが大前提です。

ただ、『大田洋子集』巻末には、浦西和彦さんによる校訂の過程が説明されています。それによれば、底本には冬芽書房版『屍の街』(昭和25年5月)が使われて、初出『屍の街』(中央公論社、昭和23年11月)市民文庫版『屍の街』(昭和26年8月)や原稿とも校訂が行われているようですが、そこには、「初めの方に書いたように」などの部分は、指摘がありません。ということは、原稿の段階でこれらがもう書かれていたと考えられます。

浦西さんは原稿と突き合わせていらつしやるので、そうすると、原稿の段階でこれは入つていたといつてもいいのだろうと思ひます。推敲の過程が明らかになれば、さらに確信が持てると思ひますが、少なくとも本文を読む限りにおいては、いまのところ私は、申し上げましたように、11章から20章が書かれて、1章から10章が書かれて、21章から30章が書かれたというふうと考えていいのではないかと思ひます。

とすると、時間の流れなどを考えると、作品全体の真ん中に入れた部分書かれて、作品の最初の部分を書いて、後ろを書くという、かなり意図的に構成はされている。特別に珍しい構成ではありませんが、意図的な構成というのは、それなりになされているのではないかと気がしています。

三

これに関連して言いますと、実はさきほど「新聞記事」が引用されているということを申し上げました。そして、基本的には3章から9章にかけて「新聞記事」は出てきます。それから爆発の当日を挟んで、あとのところ、26章から27章にかけて「新聞記事」が、再び引用されます。当たり前といえば、当たり前のことなのですが、被爆してからの数日の記述には、「新聞記事」の引用は全く出てきません。ここは、作者が体験した被爆の記録という意識がたいへん強くて、外部からの情報の挿入などの余裕がない。つまり、「新聞記事」の引用はなされないということが、改めて確認できるのだらうと思っています。

ここまで、実は日付とか時間とかを推測できるところをずっと引用していきました。これは、基本的にどの章でもあたつていきますけれども、15章を見ていただくのですが、57ページに「夜がきた」、16章冒頭64ページに「朝は陰惨であった。」という表現があります。この後、17章70ページに「昼前あたり」、76ページ「夕方までには」78ページ「夕方から夜にかけて、」という表現があり、19章84ページに「八日の夜になつても」、87ページ「六日から三日目になつたから」というような日付や時間を特定する言葉がずっと出てきます。しかも大変重要なところで、ぼんぼんと飛び込むように出てきているというのはお説みいただけたら、おわかりいただけるだらうと思えます。

やはり、さきほどの文脈からいうと、作者は、このとき記録

というのを大変意識したのだと思えます。時間の経過をきちんと入れておくことによつて、記録性を担保しようという意図が、明らかにこの段階では出てきている。さらにこの後にも、「八月二十日」とか、「九月は半ばまで」、「十七日以降も」、「十月に入ると」といった時間の経過を現す言葉がでてきています。

そういう意味では、先に引用した作者の言葉にみられるように、この作品が「小説」ではなく、「手記」であり、「構成」よりも記録性が優先されているというのは、ある面では正しいと言つてよいと思えます。ただし、記録性が重視されるのは、「屍の街」の一面に過ぎないとも言えます。

四

小説としての「構成」の意識が伺えるのは、「琴歌」の呼応においてです。どういふことかというところ、第1章から第4章を含む「鬼哭啾々の秋」と「晩秋の琴」と題された最終章30章は対応しているということです。後で触れますが、「屍の街」の特徴の一つに、登場人物が固有名詞で呼ばれないということがあります。例外的に固有名詞で呼ばれるのは、3章のところで登場する「佐伯綾子」ですが、実はもうひとり、愛称で呼ばれる人物がいます。「銀ちゃん」という登場人物です。なぜ、「銀ちゃん」が「銀ちゃん」という愛称で呼ばれるのかはよくわかりませんが、とりえず「銀ちゃん」という呼ばれ方をしています。

「銀ちゃん」の年齢は二十四歳で、「三つの年にどこかから貰われて来た子で、小さい時分からぐれ放題にぐれて、手もつけら

れぬ放蕩児」となり、その後は「不良青年」だったといえます。その「銀ちゃん」が爆心から「一キ口に足りない」場所で被爆し、「髪がぬけはじめ、歯茎から出血し、斑点があらわれた」のです。これが九月三日のことで、3章は「このような養父と銀ちゃんの間からだの、どの骨を奏でも、倅せな音はかえってこないと思われ。」という表現で閉じられます。

これに対し、30章では「銀ちゃん」は「はじめの方に書いた銀ちゃんという人は、S医師も九月末まで生きるかどうかと云っていたのに、いまも生きている」という形で再登場します。「銀ちゃん」は「凄味を持った末期の風貌のまま」に「うしなつた妻の衣類を広島のどこかの土の中へ埋めておいたと云い、放つておくと盗まれそうだから、と掘り出しに出かけた」して、「いまも生きて」います。

また、3章の「しかし、青年（銀ちゃん——長野注）の胸のなかでは、悲しい小琴が奏でられてはいないだろうか」という表現に呼応するかのように、30章では稲田に風がわたる音が「なんとも云えぬ快いリズムで琴爪を琴の糸に当てる、横にしゅつしゅつとやさしくしごいて音を出す、あの音に似ている」と形容され、「秋のいろんな虫」の音も「調子のいい琴歌にきこえる。」と表現されます。

一方、作品は「日本人飢餓の呻き」こえは、今年の田園の鬼哭啾々とした琴歌のようにきこえる。戦災と天災、二つの歯車のぎしぎし鳴ってからみ合う、瀕死の琴歌が地に這っている。」という表現で閉じられています。

この「琴歌」という言い方と、3章の「悲しい小琴」や「ど

の骨を奏でも」という表現は、おそらくは対応しています。3章に瀕死の青年として登場していた「銀ちゃん」を、最終章である30章にもう一度登場させて表現のレベルでも対応するように「琴」をキーワードとして読者に印象つけて終わるのは、明らかに作者の側に構成意識があると考えていいと思っています。

最後に佐伯綾子とはいったい何者か、という問題です。主に佐伯綾子がでてくるのは12章から19章です（30章に回想の中に名前だけ登場しますが）。

佐伯洋子のモデルについては、次のような情報があります⁴⁾。

洋子の初期の作品を探して呉市立図書館で大正時代の芸備日日新聞を繰っていた。大正十二年一月一日の紙面を見つけて驚いた。洋子の小説「悩める人々」と後の洋子の親友・佐伯綾子の小説「隔たり行きつゝ」が挿絵入りで紙面1ページを埋めていたのだ。

また、「結婚四〇日で相手の芸備日日新聞記者が死去している」と、佐伯綾子の夫が亡くなっているということ、「しとやかな淋しい女だった」というような証言が残っているということです。

一方、作中では主人公は前日に、佐伯綾子と会っていて、荷物を疎開させるために車が必要になった時に、その交渉役を担ってくれたのが佐伯綾子です。また、18章・78ページでは、「そこは佐伯綾子のいた家の傍であった。佐伯綾子はずっと昔、文学をやっていた。今では書きはしませんが、書かないことが彼女を清潔

にし、純潔であった。」と書かれていますし、18章の80ページでは、「戦争中、私どもは自分の言葉を欺いていなくてはならなかった。(中略)それは佐伯綾子にしか云えない私の浪漫であった。」という言い方をしています。

つまり、佐伯綾子という人物は、主人公が小説家であるということを証明してくれる人物なのだと思います。自分のアイデンティティがそこに反映される。小説家である私を証明してくれる、小説家でいさせてくれる。自分をきちんと認めてくれる人間であるといえると思います。それは、簡単に言えば友人の謂であり、その意味では主人公が、繰り返し佐伯綾子の安否を気にするのは、当然ともいえます。

しかし、やはり他の登場人物に比べて突出しているという感否めません。ほかに固有名詞として出てくるのは、「銀ちゃん」だけです。そうした佐伯綾子という登場人物の特異性と関連付けてしまいたくなるのが、作品の中に散見される「作家」という言葉です。17章73ページには「人間の眼と作家の眼と二つの眼で見ているの。」「いつかは書かなくてはならないね。これを見た作家の責任だもの。」と、主人公が述べる場面があります。また、30章152ページには次のような内面の吐露があります。

私のうちに作家魂の焰が燃えてくることを感じはじめて幸福である。長い冬籠りに虐げられて来た者のみが感得する、あの劇しい感動が私をゆりうごかす。原子爆弾の遭難から、種々様々なものが私の身心に派生したが、すべての嘆きは、いつか濾過機に入れられた水が濾されて、きれい

な水だけがしたり落ちるように、作家魂一本が生のまま残る気がしている。実は、広島を破壊された事実よりも、作家生活を崩壊しようとした帝国主義の無智に腹をたてているのだった。

こうした「私」の述懐は、語り手である「私」、登場人物としての「私」の述懐であると同時に、限りなく作者自身の感想として、読者に受け止められたのだろうと思います。江刺昭子さんは、大田洋子が戦時中に「国策に順応した大陸文学や生産文学」を書き、「戦争を美化する多くの言葉で銃後の女たちのけなげな覚悟を描いた「流行作家」であったことを指摘したうえで次のように述べています⁶⁾。

となれば、原爆の惨状を書き、その非人道性をあげつらう前に、この戦争で果たした己のピエロ的役割に言及すべきだった。戦争というものは、核戦争であれ、鉄砲や戦車による戦争であれ、その非人道性に変わりはなく、徒らな言葉で美化されるならない。それを敢えてした作家の責任は、作家自身のペンで償わねばならず、書きつばなし、言いつばなしですむことではない。しかし、洋子は戦時中の自分の言動にいつさいほおかむりしてしまった。死の影に脅えながら、ひたすら書きのこすことを急いだ「屍の街」の初稿にはまにあわなかったかもしれないが、出版までには一年余の歳月があり、書き加えるのは可能だった。また、その後にもいくらかでも機会はあったはずだ。

作品への批判というよりも、大田洋子への直接的な批判と言
うべきかもしれません。戦争中の戦争協力への自己批判が「屍の
街」に書かれていないというのはいささか「無い物ねだり」なの
かもしれません。が、「無い物ねだり」は措いておくとしても、た
しかに作中にややバランスを欠く形で、「私」の作家意識が露呈
していることも、また間違いがないことだと思えます。おそらく
は佐伯綾子もこうした文脈の中で捉えられるべきなのだと考えて
います。

最初に書き始められた11章からの被爆直後の場面では、「記録」
という意識が勝り、本人の回想にもあるように「手記」としての
性格が強かったのだと思えます。ただ、それは、執筆が続けられ
ていく時間の中で、単純な手記の形から、結構を伴った形に変化
していったのではないのでしょうか。そうした意識を作者にもたら
した契機の一つが佐伯綾子の存在であり、結果として作家として
の内面を語る部分が生かされるということにつながっ
ていくのだと思えます。

それをどう評価するのか、私はやはりそれは作品としてのバ
ランスの悪さだと考えていますが、とりあえず、これで発表を終
わりたいと思います。ありがとうございます。

注

- 1 山本昭宏「占領下における被爆体験の「語り」——阿川弘之「年
年歳歳」「八月六日」と大田洋子『屍の街』を手がかりに——」（『原
爆文学研究』10 二〇一一年一二月）

- 2 フランシスコ・コモッティ「大田洋子論——『屍の街』を軸にし
て」（『大田洋子を語る 夕風の街から』広島に文学館を！市民の会
編 二〇〇七年七月）

- 3 「序」（『屍の街』、冬芽書房 一九五〇年五月）

- 4 安藤欣賢「私と大田洋子との出会い」（『大田洋子を語る 夕風の
街から』広島に文学館を！市民の会編 二〇〇七年七月）

- 5 「大田洋子論」（『国文学解釈と鑑賞』特集原爆文学 一九八五年
八月）